嚴嶋神社

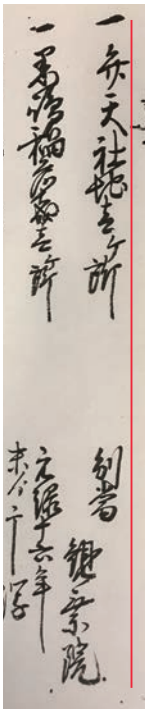
旧鎮座地：館山市館山字浜通735
現在は館山神社に合祀されている

祭神

市杵島比売命（いちきしまひめのみこと）
旧別当 観乗院

由緒

関東大震災以前は、現在の山車小屋付近に嚴嶋神社がありましたが、震災で倒壊し、その後嚴嶋神社は館山神社に合祀されました。神社の姿や由緒を語る史料はほとんど残されていませんが、館山仲町の名主を世襲で務めた岩崎家に保存されている「安房国安房郡真倉村高書明細帳」〈天明二年（1782）〉に、「弁天社地壱ヵ所　別当・観乗院」と弁天社（嚴嶋神社）があったことが記録されています。また、倒壊した楠見嚴嶋神社の材が現在の館山神社の一部に使用されており、館山神社の御神木は、嚴嶋神社境内にあった木を移したと言われています。



「安房国安房郡真倉村高書明細帳」（部分　館山市立博物館蔵）

自慢の祭

楠見の祭礼は例年八月一日・二日に行われる「館山のまつり」に山車を出祭します。

自慢のお囃子と伝統の踊りの練習は、毎年祭礼前の七月十五日から行われ、集会所は多数の子ども達で溢れます。お囃子はぴっとこ・やたい・しちょうめ・へぐり・さんぎり・かまくら等から成り、踊りは若い衆の「天狗の舞」と、子ども達による「餅つき踊り」・「左官踊り」があります。お祭り期間以外でも四月～十一月の第二、第四土曜日にお囃子の練習が行われ、年配の方から青年、子ども達へと楠見の伝統をしっかりと継承しています。

山車の曳き廻しは町内を廻る際にはゆっくりと曳き廻し、お神輿を迎える時には必ず「へぐり囃子」で迎える、という取り決めは今も変わらず受け継がれ、纏まりと伝統を重んじる高い心意気を感じさせます。

見せ場の一つでもある自衛隊前の急坂を、山車と藍染の半纏が一気に駆け上がる様は、若い衆の熱い想いと、地域の和を垣間見ることができ、過去に一度も止めたことがないそうです。

また、二日間の祭礼で見せる踊りは六回（初日は夕食休憩で二回・館山神社脇の歩行者天国踊り舞台で二回。二日目は館山神社脇の歩行者天国踊り舞台で二回・山車小屋前で二回）もあり、夜の歩行者天国踊り舞台での踊りでは、餅投げも行われ毎年舞台の前は多くの観衆で賑わいます。

一気に駆け上がる威勢のいい曳き廻し

二日目の夜に町内に帰ってきた山車は再び館山神社へ入り、祭礼が無事に終わったことを報告します。

最後に山車小屋前の山車の上から区長さん祭礼委員長さん自らによる、地元の皆さんへ感謝の餅投げが行われ、その年の楠見の祭礼は感動と共に名残を惜しみながら終了します。

一度途絶えてしまった「天狗の舞」を復活させるなど、深い歴史と伝統を重んじ、老若男女分け隔てなく地域が一つになって守り伝えてきた、自慢のお祭りです。

盛り上がる太鼓の叩き合い

復活された「天狗の舞」

8/1・2 館山のまつり

祭りの起源

大正三年、旧館山町（現在の青柳、上真倉、新井、下町、仲町、上町、楠見、上須賀地区）と、旧豊津村（現在の沼、柏崎、宮城、笠名、大賀地区）が合併し館山町になったのをきっかけに、大正七年より毎年十三地区十一社が八月一日・二日の祭礼を合同で執り行うようになりました。

その後、大正十二年の関東大震災により、諏訪神社（下社）、諏訪神社（上社）、嚴島神社、八坂神社の四社が倒壊したため、協議により各社の合祀を決め、昭和七年に館山神社として創建されました。

現在は館山十三地区八社として、神輿七基、曳舟二基、山車四基がそれぞれの地区から出祭しています。愛称「たてやまんまち」として、城下の人々によって伝え続けられてきた〝心のまつり〟です。

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。